

ChatGPT に聞いてみた 麻薬問題の歴史的背景

麻薬問題の歴史的背景や他国の対策

ChatGPT:

麻薬問題の歴史的背景や、各国がどのように対策をしてきたかを整理すると、麻薬対策がいかに複雑で、「単純な取り締まりだけでは解決できない」問題であることが見えてきます。

【1】麻薬問題の歴史的背景

◎ 古代～近代

- 麻薬(アヘンやコカなど)は古代から医療・宗教・娯楽の目的で使われていました。
- 19世紀には、イギリスが中国にアヘンを輸出して中国社会を破壊し、アヘン戦争(1840年)が起きました。
👉 「国家ぐるみの麻薬ビジネス」の先例。

◎ 20世紀:世界的に「規制」が始まる

- 1920年代:国際連盟が麻薬を国際的に規制しようと試みる。
- 1961年:国連「麻薬に関する単一条約」が発効。麻薬の製造・流通を制限する国際的枠組みができる。

◎ アメリカの「麻薬戦争」(War on Drugs)

- 1971年、リチャード・ニクソン大統領が「麻薬はアメリカ最大の敵だ」と宣言し、「麻薬戦争」が始まる。
- 1980年代にはレーガン政権が厳罰主義・大量投獄政策を推進。
- 結果:
 - 麻薬使用自体は減らなかった。
 - 特に黒人・ラテン系住民に対する偏った取り締まりと大量投獄が社会問題に。
 - その後の社会不安や格差の悪化にもつながる。

【2】他国の対策と特徴

PT ポルトガル:世界で最も注目された「非犯罪化」政策

- 2001年:すべての麻薬使用を非犯罪化(販売や密輸は依然違法)。

- 使用者は刑務所ではなく「治療・支援センター」に送られる。
- 成果：
 - HIV 感染や過剰摂取の大幅減少。
 - 依存者の社会復帰率が改善。
- 評価:「人道的・科学的アプローチ」の成功例として国際的に高く評価。

NL オランダ:寛容政策(トレランス・ポリシー)

- 「ソフトドラッグ(例:マリファナ)」はコーヒーショップで合法的に販売可能。
- 「ハードドラッグ(例:ヘロイン)」は違法。
- 使用を隠さず社会的に管理することで、裏社会の拡大や若者の非行を抑制。
- 問題点：
 - 観光客の「ドラッグ目的旅行」や、密輸との境界があいまいになる懸念も。

JP 日本:非常に厳格な政策

- 戦後、「覚せい剤乱用」が社会問題となり、1951年に覚せい剤取締法を制定。
- 現在も「厳格な禁止+重罰主義」が基本(所持だけでも逮捕・実刑)。
- 使用率は世界的に見ても非常に低い(特に大麻やコカイン)。
- 一方、依存症者への支援・社会復帰の体制が弱いとの指摘もある。

CA カナダ:段階的合法化と公衆衛生重視

- 2018年:娯楽用大麻を全国で合法化。
- 政府が規制し、税収や品質管理、青少年への制限を徹底。
- 一方でハードドラッグについては依然厳しい規制。

【3】取り締まり vs 公衆衛生アプローチ

アプローチ	内容	長所	短所
厳罰主義	罰則で使用を抑止	社会的メッセージとして明確	地下化、差別、再犯率の増加
公衆衛生モデル	依存を「病気」として支援	社会復帰や再発防止に有効	甘すぎると見られる場合も
非犯罪化	所持や使用を合法化または処罰なし	過剰摂取や感染症の減少	供給との線引きが難しい



まとめ:他国の教訓

- 需要側の根本原因にアプローチすることが最も重要(教育・支援・社会の安定)。
- 「取り締まり一辺倒」は、長期的には問題の温存や悪化を招くことが多い。
- ポルトガルのように、「非犯罪化+医療支援」の方が成果を上げている例もある。